

大学生のいじめ認識についての考察 「被害者にも原因あり」をめぐって

梅原利夫 UMEHARA Toshio

- はじめに
- I —— 2009年度授業の進行
- II —— 「被害者にも原因あり」認識を分析する
- III —— いじめについての大学生の認識構造を考える
- IV —— いじめ認識についての論の考察
- おわりに

【要旨】大学生が抱くいじめ認識において、「被害者にも原因あり」という認識は相当に根深いものである。2009年度の授業経過を事例に、この問題の所在と対応の仕方考えた。この認識を、学生が書いた冊子「私の体験的いじめ論」と、授業最終時に行った独自アンケートと、ある学生からのインタビューを材料に考察してみた。それによって大学生の認識構造の特徴が見えてきた。

さらに、「被害者原因説」に関わるいじめ認識について、文部科学省「学習指導要領」の一見したところ「正しい」提案、尾木直樹の加害者指導欠如論、NHK「中学生日記」での大討論の記録、土井隆義の「優しい関係論」、木堂椎の小説、発達障害児のいじめ被害の6つの論議を分析し、最後にこの問題との向き合い方について提案した。

——はじめに

私は、和光大学において「いじめ・不登校の教育学」を担当してきている。受講生の中には、かつて中学高校生時代にいじめの被害者や加害者となった経験のある者も相当数含まれており、多くはこの問題を正面から考えてみたいという動機で受講した学生である。それは、授業開始時にあらかじめ書いて提出することが求められている「私の関心と課題」に様々な表現で語られている。

ところで一般に言われていることだが、いじめの加害者は「なぜいじめるのか？」とい

う問いかけに対して、多くが「だって、アイツは〇〇だから」と、あたかも被害者にいじめられる「原因がある」かのような返事をする傾向が見られる。この〇〇には、「うざい、とろい、くさい」などの蔑視語が入る。これまで私は、この様な反応に対して、学生たちに様々な考えさせた上での私の見解として、次のように説明してきた。

「とろいなどというのは、本人の特性であるかもしれない。しかしそうだからと言って、それがただちにいじめられる原因にはならないのだ。このようにいじめ認識においては、特性と原因とを安易にすりかえてはならない。」

しかし、この様に述べた結果として「なるほど」と納得する学生も居るが、なお怪訝そうな表情をする者もいる。

今年度は、この様な認識の頑固さにことのほか気付かされた。

「だって、やっぱりアイツにもキタナイところがあるから」というこだわりは、授業の過程でも拭い去れてはいなかった。

むしろいじめ問題をくぐり抜けてきた自分の体験から、かたくなにそう捉えている学生もいる。私の授業の基本的な立場は、学生にいろいろ考えさせることに重点があり、私の解釈や立場に同意することを求めているのではない。それは講義要目やはじめの授業で強調してある。だから、真剣に考えた結果として、それぞれが自分の「その時点での」見解をまとめることがねらいである。そして見解は、さらに発展し変わっていくことが期待されている。

同時に、この根強い「被害者にも原因あり」という認識については、「認識が甘い」とか「誤った認識を正す」とか性急にとらえずに、もう少ししていねいに付き合い、分析していく必要があると考えるようになってきた。本稿は、そのための試論である。

I ——2009年度授業の進行

1. 授業のねらいと構想

講義要目には、次のように書いて受講を呼びかけた。

「問題提起、集団討論、発言などの形式で、いじめ問題をみなで考え合う。3つの『なぜ』（①なぜ面白がるのか、②なぜSOSを発しないのか、③なぜ被害者・加害者が入れ替わるのか）を考える。誰も『正解』は持っていない。問題に真正面に切り込んでいくファイトだけが、

授業の生命力である。いじめ問題に取り組んでいる現実から学ぶことにも挑戦したい。」

この授業は現代人間学部の専門科目であるが、全学に開いてもいるので毎年7学科全ての受講生がある。私としては、学科を意識せずに和光大学生全体を相手に考え合おうという立場を貫いている。毎年新1年生が、この授業をとりたいたいという強い希望を訴えてくるので、それまではずっと2年生以上の受講科目であったが、2009年度からは全学年生に開くことを決意した。その結果、1年生の大量受講に分布が変わった。ちなみに、単位取得者の学年別内訳は、次のようであった。

1年生37名、2年生10名、3年生8名、4年生以上0名、総計55名。

このうち心理教育学科生は40名であった。このほか、開講時に受講登録し部分的には授業にも出たが、レポート未提出や出席数不足などによって、単位未習得になった者は10名いた。

授業は、①テキストや論文資料など「いじめをどう捉えるか」に関する読み応えのあるものを読み合うこと、②6、7人の小グループに分かれて、テキスト読みやグループ内討論を活発にし、それを全体に発表して意見交換を行うことを基本にした。

2. 主な授業の進行

第1回目 趣旨を話す。「いじめ」を切り口に、現代の人間関係の課題を考える。進行計画表、次回使用の中井論文（中井、1996）印刷配布。「私の関心と課題」回収、74名。

第2回目 中井久夫「いじめとは何か」を読む。

ポイントは、中井の言う「孤立化、無力化、透明化」の3段階を、まずは中井に即して理

解できるか否かである。そのための小グループでの話し合いと全体への発表。

第4回目～9回目 6回にわたり尾木直樹の本をテキスト(尾木、2007)に読み合う。

1章・2章・3章を読み合い、議論していく。授業の前半は、各6～7人の小グループに分かれて、あらかじめ梅原から出されている章ごとの課題(各章ごとに5～7、総計19の間)について話し合い、後半は全体場で発表し、さらに意見交換をしていくという方法をとった。

第5回目 「私の体験的いじめ論」作成を課題にする(1ヵ月後の第10回目に提出)。

第8回目 梅原からの問題提起「私たちの内面に潜む『いじめ容認の心理』と向き合う」

第1フレーズ 「あの子はトロイ(A)、見ていてイライラする(B)、だから、いじめられてもしかたがない(C)」／第2フレーズ 「『嫌いな人』(α)が、いじめられているのを見る(β)と、安心する(γ)」／第3フレーズ 「いじめをやめろと言う(A)のは、自分が標的にされるリスクを背負う(I)、だから見て見ぬふりをしてその場をやり過ごすしかない(U)」

第10回目 課題論文「私の体験的いじめ論」を提出する。

第11～13回 課題論文集をテキストにして、読み合い話し合いを行う。

第13回(最終回)最終時10分間のアンケート、総数47名

今回は授業の途中で当初計画の方針を変更した。それは、「私の体験的いじめ論」提出と、それをもとにした意見交換の授業を行ったことである。その決定的な動機は、根強い「被害者にも原因あり」認識の存在に私自身

が深く考えさせられたからである。この認識はしぶとく付きまとっており簡単には変わらない。ましてや、上から「注意」をしたり「正解」を提示したりしても効果はない。そのような認識の存在に気づかせ、それと対峙する機会を持たせなければ、自分自身の課題にはなり得ないであろう。そう考えて変更に踏み切った。

3. 授業アンケートでの評価

和光大学では、授業評価の一環として全ての授業について「授業アンケート」が実施されており、当授業では7月7日(授業終了の1週間前)に行われた(総数42名)。その結果、学生の「総合的に判断して、この授業に満足している(総合的満足度)」は、「満足」59.5%、「やや満足」28.6%、「普通」9.5%、「やや不満」2.4%、「不満」0%であり、評定平均値(満足を5とし、以下4から1までとなる)は5点満点で4.45であった。これに残り9項目に関する質問に対する答えの評定平均値で見ると、4.5以上であったのが「教員は学生とコミュニケーションを積極的にとろうとしていた」「授業準備や話し方を通じ、この授業にたいする教員の熱意を感じた」、4.2～4.3が「講義要目やオリエンテーションを通じて、この授業の内容に関心を持った」「教科書や資料などの教材は適切だった」「講義要目に示された計画に沿って行われていた」「この授業を受けて好奇心が刺激され学習の意欲がわいた」などであった。

Ⅱ——「被害者にも原因あり」認識を分析する

では学生間に見られる「被害者にも原因あり」という考え(以下では、「被害者原因説」

と言う)は、授業過程でどのような表現として表れたのであろうか。いくつかの資料や発言から見て行きたい。

1. 冊子「私の体験的いじめ論」に見られる認識

(1) いじめる時の「言い訳」や「心の中」

提出者54人のうち、主にいじめる側から書いたものは9編であった。その中で典型的な思考パターンを4つ抜き出してみた(下線は梅原がつけた)。

- ①A君は、いじめられやすい人だった。…
…いじめられる人にも原因みたいなものはあると思います。

「思い返してみると、A君は*いじめられやすい人だった。太った体型、人づきあいが下手、人の目を見て返せない、気弱な性格、などが災いして中学時代にもいじめにあっていた。……いじめは、いじめる人が悪いのであって、いじめられる人は一方的な被害者だ*という意見もあるが、私はそうは思わない。たしかに、いじめる人が一番悪いです。しかしいじめられる人にも原因みたいなものはあると思います。*A君は中学の時にいじめにあった。そして高校に上がりA君がいじめられていたと知る人はほとんどいないのに、またいじめにあった。これはA君にいじめられる要因があったから*ではないでしょうか。転校したとしても、その原因を何とかしない限りA君は、また転校先でいじめられるかもしれません。」

- ②「Bちゃんが悪いんだし、シカトくらい別にいいよね。」という軽い気持ちだった。
「クラスの仲良しグループ内でのいじめだった。ある日、Aちゃんが『Bちゃんのこと今からシカトしてね。』とグルー

プ内みんなに話す。……私はこの時『Bちゃんが悪いんだし、シカトくらい別にいいよね。』という軽い気持ちだった。……当時の私の気持ちはというと罪悪感でいっぱいだった。罪悪感から抜け出さなくて、『いじめられる方にだって原因があるんだ』と何とか理由をつけて心の中でいじめを肯定するばかりだった。…
…『嫌だ。やめようよ。』という一言が言えず、ずるずると加害者を続けていた。ただ、あの空気が怖く、私は逃げていたんだと思う。」

- ③愚かな話だが、それがかえって面白くなかった私たちは、次第に目に見える形での直接的ないじめも行うようになる。

「ある一人の女生徒Yさんを、陰湿な形でいじめたのである。……その加害者の男子の中には私も含まれていた。……具体的には、Yさんの机や椅子、所有物に触れたら、あたかもその部位は汚れてしまったかのような内容のいじめだ。それをYさんの目の前では極力せず、陰湿に、しかし過激に行っていた。……ところが、私たちがいじめ行為に卑屈な楽しみを見出していた一方で、Yさんの方からはまったく反応がない。愚かな話だが、それがかえって面白くなかった私たちは、次第に目に見える形での直接的ないじめも行うようになる。」

- ④その子が他の人間にいじめられているのを見ると、なぜか分からないけどイライラしました。

「私はどちらかと言うと『いじめ』をしていた側の人間でした。その辺にある車を傷つけさせたり、物を盗ってこさせたりなど、人にバレたくないことをさせて

いました。いじめていた理由は、見ていてイライラするなど、相手にしなければ良いだけのことでした。でもなぜかイライラするのに、友達だと勝手に思っていました。その子が他の人間にいじめられているのを見ると、なぜか分からないけどイライラしました。」

(2) 4パターンの分析

これらは「被害者原因説」に関する大学生の認識傾向を良く表している。上記(1)で示した4事例に即して、その特徴を整理してみたい。

①悪意のない「被害者原因説」……いじめられる原因を被害者本人の特性に帰する考え方である。積極的にいじめに加担しているわけではなく、認識している本人も「いじめる人が悪い」と判断している。しかし依然として、原因は被害者にあると考えているのだ。このタイプはそれほど悪意があるわけではない、むしろ被害者に同情さえするかもしれない。これは典型的な認識パターンであり、学生のなかでも多く存在している。それだけに、しまつが悪いといえる。なぜなら、このような認識が、いじめを温存させる基盤を形成していると思われるからだ。見て見ぬふりをする傍観者を生み出す要因ともなっている。

②罪意識の重圧からの解放……これは明確に自分に罪悪感を持っている。だからその重圧から解き放れたくて、何とか理由付けを行おうとしている。このタイプは、自分の認識のずるさを自覚するチャンスが高いので、そうなれば克服が可能な位置にいると思う。

③無反応装う被害者にエスカレート……

一つのパターンとして、いじめる→被害者が苦しむ→ひそかに楽しむ→いじめ、の円環した連鎖反応が見られる。しかしこの場合には、被害者が無反応を装っていることにいじめ感情が逆なでされ、かえっていじめをエスカレートさせてしまうのだ。実際には被害者は、必死に耐えているにもかかわらず表情には出さないよう懸命の努力を強いられているのだが、残念ながら加害者はそれを読み取ることができない。自分の感応力が及ばないのに、逆に被害者に憎しみを転化させてしまう。自分でも「卑屈」であるとは認識しているのだが、それ以上に自分に反省的思考が向かわないよう無意識に防衛している。攻撃性にはどめがかからない可能性がある。

④加害者・被害者の依存・包摂関係……加害者と被害者は、そのような立場の中で相互に依存関係になっている。仲間うちだと思いながら、いじめ・いじめられ状態が続いている。加害者は被害者に対して、「かまってやる、友達になってやる」とお仕着せがましい感情で依存している。だから、被害者がこの輪の外でいじめられていると、加害者は猛烈に嫉妬を感じイライラがつのるのだろう。

2. アンケート調査に見られる認識

授業最終回の最後10分間でアンケートを行った。このことも、私の授業では初めてのことであった。

まず結果を一覧表にしてみた。それらについていくつかの点を考察してみる。

(1) 受講者の中学・高校時代での立場は、多様であった。この様に様々な立場を経験した者が集まって意見を交換し合うことこそ、授業の重要な意義であると思う。

なかでも、「主にいじめる者」8名、「主にいじめられる者」7名、「いじめ&いじめられる者」6名がおり、言わば直接的体験当事者は21名(45%)にのぼった。これは授業テーマに関心の強い者には体験当事者が多いと考えられる。中高生の実態としても、いじめ・いじめられの体験が強く浸透していることを反映した数値である。また「傍観者」だった受講生も多い(12名、26%)ことがわかる。「傍観者」の内面に渦巻いていたであろうと思われる葛藤や疑問について、この機会に考えてみたいという意識の表れであろう。

(2) 私がもっとも知りたい項目であり、アンケートの中に滑り込ませていた「いじめられている人は、その人にもいじめられる原因がある、と思う」(質問Ⅰ-4)の結果は以下のようなものだった。

「大いにそう思う」4名、「そう思う」15名、「どちらでもない」14名、「そうは思わない」6名、「全くそうは思わない」8名。

まず第1に、「大いにそう思う」を含めて「そう思う」が計19名(40%)にのぼり、「全くそうは思わない」を含めて「そうは思わない」の計14名(30%)よりも多かった点に注目した。この結果は、私の授業は担当教員の見解を強く主張するものではないという特色を差し引いたとしても、一連の学習過程をへてもなお根強く存在している認識である、と考えたほうがよい。むしろ、いじめ問題の学習に関心を持っている者の間でさえ、「被害者原因説」が相当に浸透している、と捉える

べきであろう。それほどに、現在の当事者である青年期世代に、日常の体験を通して広く深く浸透している感覚なのである。

第2に、しかし同時に「全くそうは思わない」という確固たる立場が17%もいた、という事実にも注意を向けたい。「被害者原因説」が根強い中で、それを打ち消す立場を確保することの困難さを知れば知るほど、「被害者には、いじめられてよい原因などないのだ」という葛藤を経ての認識に至った態度表明であると捉えたい。

(3) Ⅱでは、今の時点で中学校・高校時代をふり返って、あえて自分の立場を自己規定してもらった。

もっとも多かったのが、「傍観者」12名(26%) ついで「無関心者」9名(19%)で合わせて21名(45%)となった。これは、いじめをテーマにした授業の受講生のうち最後まで到達した学生の中での数字なので、子どもたち一般の分布ではもっとずっと多くなることが予想される。

ついで当事者とも言える者が、「主にいじめる者」8名(17%)、「主にいじめられる者」7名(15%)、「いじめ&いじめられる者」6名(13%)、総計21名(45%)であった。

上記(2)で扱った項目(質問Ⅰ-4)を、直接の体験当事者の立場の違いで分けてみたらどうなるであろうか(「大いにそう思う」から「全くそうは思わない」の順に、回答人数を記す)。

○いじめる者(計8名)

——2、1、2、1、2

○いじめられる者(計7名)

——0、2、3、0、2

○両方の者(計6名)

——0、4、0、1、1

〈資料〉2009「いじめ・不登校の教育学」授業アンケート 総数47名

Ⅰ. 以下の質問にお答えください。回答は、⑤～①の番号を記入してください。

⑤大いにそう思う、④そう思う、③どちらでもない、②そうは思わない、①全くそうは思わない	⑤	④	③	②	①
1. いじめる行為は、基本的人権の蹂躪である、と思う	21	19	5	1	1
2. いじめている人は、犯罪者なので、いじめ行為に見合った罰があたえられるべきである、と思う。	0	14	15	12	6
3. いじめている人を、大人や教師が指導することによって、やめさせることができる、と思う。	6	17	14	8	2
4. いじめられている人は、その人にもいじめられる原因がある、と思う。	4	15	14	6	8
5. いじめられている人が、自分のつらさを親や家族に言わないのは、理解できる。	18	24	3	1	1
6. いじめられている人が、それから逃れるために不登校になるのは仕方がない、と思う。	15	19	6	6	1
7. さしたる抵抗もせずにいじめられているのを見ると、私の方がいららする、と思う。	4	11	11	11	10
8. いじめは、人間社会に見られる差別や攻撃性の反映である、と思う。	14	22	9	1	1
9. いじめは、人間社会が続くかぎりなくならない、と思う。	18	21	8	0	0

Ⅱ. 今の時点で中学校・高校時代を振り返ってみると、あえて分類すれば、あなたは次のどの立場にあてはまりますか。番号で記入してください。

① 主にいじめる者	8
② 主にいじめられる者	7
③ 傍観者	12
④ いじめ&いじめられる者	6
⑤ 無関心者	9
⑥ その他	5

Ⅲ. 今年の授業を受けてみて、授業前と授業後とで、いじめに関する認識で大きく変わったと思われる点がありますか。もしあればそれを、3つ以内（1つや2つでも良い）選んでください。

① いじめには歴史があり、時期によって特徴があることが分かった	10
② いじめの定義は、時代によって変化してきた。	10
③ いじめの解釈は、立場によって大いに変わる。	26
④ 私は自分のいじめ体験をふり返ることが出来た。	15
⑤ 子どものいじめは、大人を含む人間社会の問題の反映である。	15
⑥ 最近のネットいじめの深刻さについて、考えさせられた。	15
⑦ いじめについて、受講生の多様な考え方に触れることができた。	31

この様に「被害者原因説」を、当事者の違いで見てもほぼ万遍なく分布しており、必ずしも「加害者は⑤に偏り」「被害者は①に偏っている」とは言えないことがわかる。いま少ししていねいに傾向を見ていこう。加害者には、さすがに他には見られない⑤の意識がある。しかし認識は万遍なく広がっており、「①被害者に原因があるとは全く思っていない」者もいる。さらに被害者の方も、①もあるにはあるが、「④被害者にも原因があると思う」にもいる。両方の体験者では、④が突出している。これらの傾向については、今回はサンプル数が少なかったので、今後とも注目して調べて行きたい。

(4) Ⅲでは授業の前と後で認識の変化を問うた。それによれば、最も多かったのが「受講生の多様な考え方に触れることができた」であり、のべ31名(全指摘数の66%)もいた。次には、「いじめの解釈は、立場によって大いに変わる」で、のべ26名(55%)であった。

Ⅳの自由記述で本稿に関わって考えさせられたのは、以下のようなものであった。なお、()内は、上記(2)の質問に対する、中学校・高校時代の立場別と回答番号をリンクさせたものである。

- ①「立場での解釈の違いが一番面白かった。結構深いところまで行った気がする。」(加害者で⑤)
- ②「いじめは問題が深く、山よりも高い話だと思います。この授業を通じてとてもじゃないけど難しい内容だと思い知らされました。」(加害者で④)
- ③「いじめられている方に原因がある云々ではなく、いじめはダメという考えが改めて私の中で強く定着した。」(加害者で

①)

- ④「いじめは被害者に何かしら訴えるにあたっては、とても卑怯な手段であること。被害者は何も悪くない、そんな筋合いはない。ただ、それぞれにその人にとっての課題はあります。」(被害者で①)
- ⑤「いじめについて多くの人たちの意見が聞けてよかった。自分の思っているいじめ問題について、もう一度深く考えることができた。」(被害者で③)
- ⑥「それなりに何も考えていないように思える学生でも、それなりに考えているのだと思った。体験ではなく、客観的に考えることができた。」(被害者で③)
- ⑦「自分の考え以外の考えがたくさんあり、自分の考えは相当に偏った一部の考えだということがわかりました。」(無関心者で④)
- ⑧「いじめは社会的な面から見るべきところがたくさんあるんだな、ということを手伝った。心の問題ももちろん考えるべきだけれども、今度は学校システムの根本的な問題も考えなければいじめ問題は解決されないなとも感じました。」(無関心者で⑤)

(5) 以上のアンケート結果を総評してみたい。

まず第1に言えることは、「被害者原因説」は、細かく見れば立場による若干の傾向はあるものの、加害者・被害者を問わずに見られることである。特に被害者自身でさえそう捉えている者がいることには注目したい。中井久夫が指摘しているように(中井、1996)、「孤立化、標的化」されていく中で、「何ということか、被害者さえ自分はいじめられても仕方がない存在だと思い込む。……この被害

者の思い込みは、実際に被害者をそういう見掛けに仕立て、加害者と傍観者とをいっそう勇気づける」ことになる。

次に第2に言えることは、授業で大きく変わったことは、自分のいじめ観が揺さぶられたり、他人の考えと交流することで立場による解釈の違いに気付く、いじめ把握の難しさを感じとったことである。それまでは、個人間の行為や心の問題にのみ目が向いていたが、いじめ現象は広く社会的な背景を持った問題である、という認識に気付いた者もいた。授業は、ここまでに到達することで終わってしまった。一定の問題提起はできたかもしれないが、その後の認識の深化をどのように用意したらいいのだろうか、考えて行きたい。

これとも関わり第3に言えることは、「被害者原因説」に立っているにしても、自分でそのような認識や感情を自覚的に取り出すことができ、さらにはどうしてそう思うのか、認識や感情の根底にあるものは何なのか、というレベルにまで掘り下げていくことの重要性である。このことが、教育指導のあり方として問われているのではないだろうか。

3. ある学生の認識

(1) 第8回目の授業でのやり取りの終了後、ある男子学生がやってきて語ってくれた。要旨は次のようであった。

「やっぱり、いじめのターゲットになりやすいタイプの子どもっているのではないかなと思うんです。どんなにいじめは悪いと言っても、いったん標的にされたらどうしようもない。」

私はこの学生は、自分のこれまでの体験から「学校や社会のいじめ」について、かなり真剣に考え続けていることがわかった。授業

後にわざわざ教員のところにやってきて、自分の意見を聞いてもらいにくるほど切実だった。したがって、後期になって11月に改めて考えを聞いてみた。その時は、第8回目の授業で提起した3つのフレーズについて、さらには第10回目に提出した『私の体験的いじめ論』から、重要な論点を考え合う』について、どう考えるかが質問の中心であった。

(2) その回答の特徴は、学生の発言で表現すれば、以下の4点にまとめられる。

- ①「今の学校が子どもたちに求めているのはフツウの存在なのだと思う。いじめのターゲットになりやすいのは、このフツウからはずれた浮いた存在の子どもでもある。例えばトロイとかノロイとか。要するに『出る杭は打たれる』のだ。」
- ②「『こいつフツウじゃない』と烙印を押されたヤツがいたら、何故かホッとするんです。いわゆる標的化と言うのだろうか。とりあえず、自分じゃなくてよかったと安心するわけ。」
- ③「いったん自分が標的にされたら、いくら正義を叫んでもどうにもならない。」
- ④「例をあげると、サザエさん一家のような家族・家庭関係だったら、いじめ(ようなという感情)は起こらないのではないかな。3世代間に渡る一家団樂のコミュニケーションがあると、子どものおかしさもキャッチできると思う。」

(3) この認識構造をどのように捉えればいいのか。

彼は現在の学校には、口では「一人ひとりの個性を大事に」とか「みんな違っていい」などと言いながらも、その「個性や違い」の

幅はおそろしく狭く、画一的とも言える子ども像に収斂されてしまうような（フツを求める）圧力が働いているのではないかと直感的に捉えているようだ。だから「出る杭は打たれる」と感じているのだろう。

そうなると、日常の子どもは「素直で、文句も言わずに、そこそこに勉強する」フリをしなければならない。しかし、そのような生活ではストレスが溜まってこざるを得ない。誰かをターゲットにして（標的化）、あたかも「生け贄」を捧げるかのように、いじめ行為を集中させてしまう。

この様な状況を生み出す学校システムは、何も学校に限ったことではない。むしろ学校を覆っている社会システムや共同体の在り方が、学校にも押し寄せてきていることに、学生は気付いている。だからいじめは簡単にはなくならないのである。そして被害者に原因を押し付けてしまうのである。彼が言いたかったことを、私はこの様に引き取らせてもらった。

Ⅲ——いじめについての大学生の認識構造を考える

1. いじめにかんする大学生の認識については、少年少女期の真っ只中にいる当事者とも違うし、教師や親など大人世代とも違う独自の立場と特徴がある、と私は次第に思うようになった。

まず学生にとっては、今に続く（中高校生時代から）リアルな体験認識の延長で考えられている。さらには、青年期世代として、大学生の今でも友人との関係の取り方で悩む現在進行形の課題なのだ。そこには、大人世代や、教育の対象として考えている世代、研究の対象として考察している者とは全く違った

切実さがある。つまり「いじめ問題」は、近い過去の問題であるとともに、それ以上に今に現在の課題なのである。

もうひとつの特徴は、それでも「あのつらかった中高校生時代」をふり返ることが可能な位置にいるということである。社会的には成人の入り口におり、自分・社会・世界・人生などについて、広い視野から考えられる位置にいる。さらに幸いなことに、大学生活は毎日固定して編成された学級を基礎とはしていない。したがって閉鎖的な学級の中でありがちないじめは起こりにくい。だから、いじめを学習テーマに掲げた授業が成り立つし、学生はそれを学習課題として意識し選択してきたのである。

2. 大学生がよく発する言葉に、「昔のいじめと比べて今のいじめはどのような違いがあるのか」という疑問がある。こうした背景には二重の誤解が含まれているようだ。まず、「今のいじめほどひどいものはなく、まだ昔のほうがましだったのではないか」という歴史認識上の誤解がある。いまひとつは、学校・学級生活でのいじめの実感が、いじめ問題のすべてであるかのような錯覚を持っていることだ。

私が思うに、昔のいじめもそれは相当に残酷であった。例えば、1950年代から60年代初めにかけての典型的ないじめは次のような特徴を持っていた。

○貧乏ゆえにいじめられる

……貧富の差別

○在日朝鮮・韓国人ゆえにいじめられる

……民族差別

○障害ゆえにいじめられる

……障害差別

○部落出身ゆえにいじめられる

……出生地差別

見られるように、これらは本人の努力ではどうしようもない特徴を理由に差別され、それ故にいじめの「理由」にもされていたものである。これらは、基本的人権の乱暴な蹂躪であるが、それが社会の多数の認識になるまでには、筆舌に尽くしがたい苦しみがあり、人間の平等を叫び権利を勝ち取るまでの長い闘いがあった。このような社会を反映させた小説やノンフィクションのテーマにもなってきた。こうした先人の努力の成果もあって、現在では表向きは露骨にいじめの「理由」にすることは少なくなっている。

しかし、だからと言って現在のいじめは「軽く」になっているとは言えないのだ。いじめ「言い訳」にする言語表現の中身が変化してきたにすぎない。相変わらず、そこには相手を見下すような差別構造が横たわっている。

また現代のいじめ問題も、学校は一つの典型ではあるが、それだけではない。もっとも深刻ないじめに、職場でのいじめ問題がある。これは、職場での密着した人間関係の中で、成果を競わされる業績主義がはびこり、上下の指揮命令関係が貫かれ、責任のなすり合いが横行しがちな環境に置かれているので、ストレスも爆発寸前にまで溜まり、そのはけ口がいじめにエスカレートすることがある。この様な閉鎖的な人間関係の中でストレスが充満する場としては、軍隊（現在は自衛隊）の中での初年兵いじめが典型である。さらに減少傾向にあるとは言え、姑の嫁いびりもなくなってはいない。このようにいじめを生み出す社会構造にまで視野を広げておく必要がでてきている。

3. 梅原からの問題提起文書「私たちの内面に潜む『いじめ容認の心理』と向き合う」

第8回目の授業で配布した文書を以下に全文採録する。これは、7回目に書いてもらった小文の中に、いじめ問題を考える上で見のがせない認識パターンが見られたからである。学生の認識に対する、この時点での私の受けとめ方が率直に示されていると判断するので、以下に引用しておきたい（下線は原文ママ）。

第1フレーズ：あの子はトロイ（A）、見ていてイライラする（B）、だから、いじめられてもしかたがない（C）

あなたは、この様な感情に、どのような反応を示すであろうか？ 心のどこかに、同調する自分がないだろうか？ 同調するまでは行かなくとも、なんとなく「わかる」ような気がする人は少なくない。この授業は、「いじめたい気分になる」ことを頭ごなしに否定したりしないし、いじめを表面上でだけ撲滅したりすることを求めている。確かに、いじめる行為は人権の乱暴な蹂躪であり、「○か×か」と問われれば、「人間としてすべき行為ではない」と考えてきた。しかし、「いじめっ子（加害者）」は「犯罪者」であり、彼（彼女）にはそれ相応の「処罰」が与えられれば「問題は解決した」とは考えてはいない。

なぜなら、人権蹂躪行為に至らないまでも、少なくない子ども（大人も）が、「いじめられてもしかたがない」という気分を宿しているからである。このことをどのように考えたらいいのだろうか？ そのような心理と真摯に向き合って欲しいと思うのだ。

（A）は事実としての現象を述べているだけである。ここには無数の現象が入る。「臭い」「わがまま」……。かつては、明確にさ

げすみの意味を含んだ「貧乏」とか「〇〇人（民族蔑視）」も入っていた。しかし、現象自体は単なる事実を表現しているにすぎない。

では、なぜそれが（B）のように「イライラ」の原因となるのだろうか。同じ（A）を見てもイライラしない人もいるのに。そこには明らかに、（A）を見るさいの自分の好き・嫌いの「基準」が座っている。それは必ずしも全員が同じであるとは言えない。いったいなぜ自分にこの様な「基準」が形成されたのだろうか。誰も初めからそうであったわけではない。そのような感情が根付いてきた過程を自己吟味することは、きわめて重要である。自分の育てられ方や価値観形成の跡をふり返ることにつながるだろう。

もっとも重大な問題は、仮に（A）があり（B）であったとしても、どうしてそれが「だから」という接続詞で、いとも簡単に（C）という思いにつながってしまうのだろうか？ はたして（B）→（C）に至る過程に、論理や感情の飛躍はないのだろうか？ 飛躍だとすれば、なぜあまり自覚（躊躇）しないで連結してしまうのだろうか？

この点を、立ち止まって考え合ってみよう。あなたの考えを聞いてみたい。

第2フレーズ：「嫌いな人」（ α ）が、いじめられているのを見る（ β ）と、安心する（ γ ）

これも、各発表グループの報告（09.5.22 テキスト第2章1－②）で多く言われたフレーズである。結論に「安心」という言葉が用いられていることに注目した。

すでに（ α ）には、上下・高低（レヴェルの低い人）・速遅（トロイ）・好嫌などというように、上下関係で他人を見下ろして「下位にある（と思われる）」者へのさげすみのまな

ざしが送られている。この前提条件には、「自分より下の者」はいじめられても仕方がないという「根拠のない優勝劣敗基準」が居座っているようだ。そして、「密かな期待どおり」に（ α ）が「いじめられているのを見る」（ β ）と、自分の心はなぜか「安心してしまう」（ γ ）のである。

しかしよく考えてみると、（ α ）という下位認識は相対的なものである。これでいけば、いつ自分が「上の者から見れば、下位に見られる」場面に出くわすかもしれない。ならば上下関係にとらわれている限り、自分の気分はいつも不安でしかたがないではないか。（ γ ）の「安心」とは、「恒常的な不安の中の、つかの間の安心」に過ぎないのではないか。私たちは、そのような「安心」を追い求めているのだろうか？ その時の「安心」とは、どのような気分や感情なのだろうか？

しかも（ β ）は、自分から積極的にいじめに加担しないまでも、どこかに「いじめらるのを」期待する心情がまさっているように思われるのだが、どうだろうか。いじめは人権蹂躪行為であると頭では「認識」しているはずだが、実はそのような蹂躪を密かに期待している自分がいるではないか。

「いじめは、いけない（と権威ある人が言った）→だから、やらない」という図式では、「いじめは、時と場合によっては仕方がない（という感情が勝ると）→だから、見ても関わらない」という行為に、いとも簡単に移行してしまうのではないだろうか？

第3フレーズ：いじめをやめろと言う（ア）のは、自分が標的にされるリスクを背負う（イ）、だから見て見ぬふりをしてその場をやり過ごすしかない（ウ）

この気分は、過去から現在までの大人の世界に蔓延している。強大な権力者の横暴に手をこまねいているだけの民衆の存在。闇市をしきるマフィアや暴力団の圧制に、おとなしく従わざるを得ない名もなき弱い市民。多くは、映画の題材にもなってきた。「正義を振りかざしても、自分が損をするだけ」という損得勘定は、現実には多くの「泣き寝入り」層を生み出してきた。

この場合、相手が集団をなして狼藉を働いているのに、こちら側はばらばらに孤立させられた個人で対応しようとしている。これでは、勝てないし正義も通らない。

正義の論理(確信)×[集団のパワー]の総計が、いじめパワーを圧倒するような継続した政治力(ポリティカルパワー)の集積が必要ではないか。

とつぜん話は飛ぶようだが、『蟹工船』(小林多喜二)の主題は、ここにあった。

現代の学校では、民主的に組織運営された学級会での討論、周到に用意されたロールプレイ、加害者と被害者への質の違うそれぞれの教育的なケア、人権蹂躪であるという認識と感覚の獲得、強力な応援者がついた上での被害者の告白と告発、加害者の心からの謝罪行為、民主主義的な討議と決議による宣言など、困難だが克服へ向けた有効な取り組みの経験がある。

いじめ行為は、現在の人間社会では完全に消滅させることは不可能かもしれないが、初期段階で適切に対応し、「深刻な蹂躪」に至らないうちに芽を解消することは可能である。

(文書からの引用終わり)

今読み返してみると、この文章に表われている私の認識は、上から目線の調子が残ってい

るという点でまだ不十分さが反映していると思う。しかし、当時の私は学生たちに、どうしても真剣に考えて欲しいテーマとして、私の思いをナマのかたちでぶつけてみたかった。

IV——いじめ認識についての論の考察

いじめに関する議論や提案は様々にあるが、ここでは本稿に関わりのあるものを取り上げて考えてみたい。

1. 文部科学省「学習指導要領」のレベル

いじめ問題を学校生活に横たわることとして重視し、道徳や特別活動で取り扱っている。小学校を例に該当部分を取り出してみるが、中学校においても同じ趣旨が貫かれている。

「第1章 総則 2」では、学校における道徳教育について書かれており、その最後には次のような表現がある。

- ①「その際、特に児童が基本的な生活習慣、社会生活上のきまりを身に付け、善悪を判断し、人間としてしてはならないことをしないようにすることなどに配慮しなければならない。」

また、「第3章 道徳」の「第5学年及び6学年」の「4 主として集団や社会とのかかわりに関すること」の(2)では、次のように書かれている。

- ②「だれに対しても差別をすることや偏見をもつことなく公正、公平にし、正義の実現に努める。」

ここでは「人間としてしてはならないこと

をしない」という表現と、「公正、公平、正義の実現」という表現に、「いじめをしてはならない」というメッセージが含まれていると読める。これは、それ自体としては誰も否定するものでもなく、「正しい」提案であろう。

しかし、現代の子どもに「いじめをしても良いか、してはならないか」と問えば、一様に言葉では「してはならない」と答えるであろう。問いと答えとの関係では、いじめ行為の是非論にはすでに決着がついていると言える。問題は、その先、あるいはその根底にあると言わざるを得ない。つまり、「してはならない」という答えであるにもかかわらず、「いじめたくなる心情」は払拭されてはいないことが問題なのだ。そこに「被害者にも原因がある」という認識に囚われた人間関係論がはびこる根拠が存在している。

学習指導要領の指摘のレベルでは、確かに「正しいこと」を書いているかもしれないが、そこからは、子どもたちの「本音に横たわる意識」の変革に迫る指導論は出てきにくい。

道徳教育とは、「してはならないこと、しなければならぬこと」を植え付ける性格のものではない。自分の納得に基づいた自主的な判断で、「価値と行動の選択基準」を自分の中に形成していく営みなのである。

だから道徳教育の名において、上のような「本音と建前」の並存状況を作り出しているとすれば、それは結果として「不道徳」な教育に陥っていると言わざるを得ないだろう。

2. 尾木直樹の加害者指導欠如論 (尾木、2007)

尾木は、私たちが検討した共通のテキストで次のように述べている。

「学校がいじめ防止や解決に成功できな

い理由は、これまで述べてきた日本の教育システムや指導のあり方の問題だけではありません。加害者を正しく指導するという視点が欠如している点も大きいのです。」(尾木、2007、p.43)

「なぜ日本の場合、加害者への指導という点を欠落させ、ともすると責任を被害者へ転嫁させてしまうのでしょうか。」(同、p.44)

「いじめの加害者にとっても、いじめは自分にとって大きな『負』を抱えることだと認識させることが必要でしょう。」(同、p.46)

さらに尾木は、すでに別の本で(尾木、1997)、この加害者指導欠如論に対して、教師の側に「被害者原因説」認識があることを指摘していた。

「教師の方も重大な問題を抱えている可能性があります。それは、『いじめを受ける子にも問題がある』との思いから、結局肝心の加害者の指導とその非人間的加害行為からの救出に着手できなかったり、効果を上げることができない点です。」(p.7)

そして尾木は「この構造と背景こそ問題」とであると、次のように述べている。

「それは、日本のこれまでの教育実践が、子どもの問題点や未熟性を発見し、それを治療することがあたかも教育であるかのごとき錯覚に陥ってきたことが、いじめを受けている子の中にある『弱点』や『問題点』『改善点』にいきおい厳しい目

を注ぐ結果になっているようです。」
(p.7)

これは「被害者原因説」が教師の側にあることを指摘した貴重な議論である。

しかし残念なことに、他ならぬ子どもの側にも、この認識が見られることに対する言及が見られない。もちろん、教師や大人の側にこのような認識があるからこそ子どもにその影響が及ぶのだ、という説明も成り立つであろう。しかしそれだけなのだろうか。子どもの認識の分析は単なる大人からの一方的な影響があるということで、説明がついたと言えるのであろうか。さらに一歩進んで、子ども自身の認識構造の特色からも、「被害者原因説」に陥りやすい問題を考えて見る必要があるのではないだろうか。本稿では、この点を自覚して考察している。

3. NHK「中学生日記」の討論から

NHK番組の「中学生日記」に出演している現役の中学生130人が集まって、大討論会が行われた(NHK, 2008)。それは脚本のあるドラマではなく、ナマの中学生が「約3時間にわたる本音の討論会」を行った記録である(「第1章 激論! 僕たちのホンネ〜日記生130人の大討論会」)。そのテーマの一つが、「いじめられる側にも問題がある?」(同書、pp.14~16)である。そこでの議論の柱を整理して抜き出してみたい。

- ①いじめられる方にも原因がある。自己中心的な人が結構いじめられると思う。
- ②性格は生まれつき身に備わっているから、そういう理由でいじめるのはおかしい。
- ③性格を直そうと努力しているのか。②はいじめられている側の「一番、被害者ぶっ

ている意見だ」。「でも、いじめられている側に原因があるっていうのは間違い」。

- ④自己中や短所も一種の個性。「個性を直させていうのは、やっぱちょっとムチャクチャ」。
- ⑤「孤立してから、失った信用を取り戻すのは難しい」から、自分の性格を直したほうがいい。
- ⑥自己中は直せるかもしれないけれど、「暗い人、物静かな人」がいじめられている場合はどうする? 急に明るくなれと言われても、どうしようもない。
- ⑦「いじめられる側に原因があるっていうのは、結局はいじめている側のいじめるための理由だと思うんです。」

ここには中学生の一つの典型的な認識が表現されている。人間に特有の性格論に原因問題が集中してしまい、しかも性格は生まれつきかそれとも直せるのかに焦点が移っている。しかし、中学生の中から「被害者原因説」が論点として登場したという事実注目したい。やはりこの問題は、避けて通れないテーマなのである。

前年度の私の授業で、この部分を読み合って学生間で議論しあったことがある。それを終えた後に書いた学生の感想を見よう(2008.6.24、記録して7.1に配布プリントから)。

- ①正直、特に①とは思わない。本当の自己中ならあきられて人は離れていってしまうと思うからです。なので③の意見に、なるほどと思いました。そして⑦にも一理あると思いました。
- ②自分も⑦に同意できます。今までのそのいじめられる理由っていうのも理解できるのですが、それはいじめている側がつけた後付の理由ではないかと思います。

中にはいじめられるような理由もなく、ただ「気に入らない」という理不尽な理由でいじめられている人もいます。

ここでも学生の認識は揺れている。中学生の議論の枠内に引きずられてしまっており、それらを大きな視野から捉えなおす立場には立ち切れていない。

4. 土井隆義の「優しい関係」論（土井、2008）

土井は、今日のいじめを生み出すものの特徴を、若者たちの「優しい関係（対立の回避を最優先にする人間関係）」という概念で説明しようとしている。

「そこで、もっと積極的に対立点をぼかすために、互いの関心の焦点を関係それ自体から逸らしてしまう必要が生まれる。現代型と呼ばれるいじめの特徴はここに由来している。それは互いのまなざしをいじめの被害者へと集中させ、自分たちの関係から目を逸らせてしまうことで、『優しい関係』に孕まれる対立点の表面化を避けようとするテクニックである。」（土井、2008、pp.18～19）

「かくして『優しい関係』を営む子どもたちは、いじめて笑い、いじめられて笑う。傍観者たちもまた、それを眺めて笑う。互いに遊びのフレームに乗り切り、彼らが『いじり』と呼ぶような軽薄な人間関係を演出することで、いじめが本来的に有する人間関係の軋轢が表面化することを避けようとする。」（同、p.32）

土井は「他人と積極的に関わることで自分が傷つけられてしまうかもしれないことを危惧する『優しさ』」に注目し、それが「いじ

めを生み出す『優しい関係』」（第一章の表題）であると展開している。若者の「優しさ」に焦点をあてたことは重要な着眼だったと思う。しかし、「その重さをやりすぎすために編み出された人間関係のテクニックとして、いじめと言う行為が捉え直される」（p.11）という記述にまで至ると、若者の間にいまだにはびこるいじめ問題の本質把握とは、ズレているのではないかと心配を覚えた。

また土井は、いじめ認識を歴史的な変遷過程（80年代なかば、90年代なかば、2005、6年頃）で段階づけ、今日の特徴は過去とは違ってこの「優しい関係」にあるとしている。しかしいじめの特徴は、時代の各段階で全てすっかり変化してきたのではなく、青年たちの心理には今でも過去2回の特徴が層状態のように蓄積されている。問題は重層的なものであると思う。土井の論には、現在の特徴を規定しようとするあまり、この点の指摘が弱いと思う。

5. 木堂椎『りはめより100倍恐ろしい』（木堂、2007）

土井も引用した「いじり」について、高校生の時に小説として展開しているのが木堂である。その中で作者のいじめ認識に関わって書かれた部分を引用したい。

「いじめなんかよりいじりのほうが全然怖いと思う。……両者には決定的な差異がある。

いじめには被害者に絶対原因がある、と思う。……絶対そいつにも非がある。性格上に問題がある。協調性がなく浮いているだけだ。……

いじりは原因がこれといってない。強い原因を求めるなら、そいつがとっても

面白いということだけだ。……人気者と
いじられキャラは紙一重。……。

……。いじめなら証拠もあるし先生も敏
感に気づく。親も考えてくれる。必要と
あれば登校拒否だってできる。いじり
には逃げ道がない。

そしていじめはふと止まる可能性がある。
いじりは終わらない。……そして加害者
の罪の意識も少ない。それが一番のいじ
りの残酷さだ。」(pp.39~40)

この小説では「いじり」の恐ろしさが主テ
ーマであるので、それとの比較でとりあげら
れる「いじめ」については、「まだましであ
る」という文脈で評価されてしまっている。
しかも、そのいじめ認識は完璧に「被害者原
因説」で塗り固められている。被害者の非とは、
「性格」であり「顔の醜さ」であり「体重や
身長」であると言う。いじめには「逃げ道」
があり、「止まる可能性がある」とさえ言う。

ここに作者のいじめ把握の底の浅さが露呈
している。私は「いじり」の残酷さを表現す
ることを非難しているのではない。それを
「いじめより100倍も恐ろしい」という比喩を
用いることで、結果的にいじめ行為を免罪し
ていることを問題視しているのだ。しかも、
その際はいじめ認識が、誤解と偏見に基づい
ている。執筆当時高校生であったにしても、
文章を公表することによる偏見ばらまきの弊
害は計り知れない。そのことを問題にしたい。
この小説は、高校生の間に「被害者原因説」
がいかに根強いかを、否定的な形であらわに
したと言えるであろう。

6.「発達相談から見た発達障害児のいじめ ・不登校等」相澤雅文(京都教育大学)

学会での発表事例(SNE学会第15回大会、
2009.10山形大学)として、アスペルガー症候
群と診断された中学生の『「いじめ」を主訴
とした相談』が報告された。そして、この
「子どもの課題となる点」として次のような
特徴が指摘されていた。

①相手の気持ちや場の理解が適切にできな
い。

②一方的に自分の思いを通そうとする姿が
多くみられる。

③友達が嫌がることを繰り返して言い続け、
けんかの原因を作るなどクラスのトラブ
ルを頻繁におこす。

④被害者意識が強く自分からけんかの原因
を作っているにもかかわらず常に自分を正当化しよ
うとするため、クラスの友達からの受け入
れは大変悪い。(以下略)

ここで注目すべきは、相澤も指摘している
ように、これらの現象は発達障害から派生す
る行為特性であるので、それらは該当児の
「発達課題」と捉えるべきであって、けっし
てこれをいじめられてしかるべき原因である
と認識してはならないということである。本
人の自己肯定感は低い場合が多いので、これ
らを原因にしていじめられると、ますます萎
縮してしまい自己否定感で固められた人格に
なる危険性が強い。

この論点は、これまでのものとは異なっ
ている。言わば新しい問題である。この様な現
実があることを私たちは承知しておく必要が
ある。本稿Ⅲ-2で述べた「かつての障害差
別」とも異なっている。かつての障害問題と
は、障害の事象が誰にでも可視化されていた。
新しい障害問題は、一見すると障害には見え

ず「怠けやウザッタイ」現象に見間違えてしまうことである。そこで課題となるのは、周りの大人や友達がどのような認識をもって接触していくのか、障害者本人が周りの大人や友達にどのように理解を求めていくのかという問題である。

——おわりに

以上で見てきたように、大学生のいじめ「被害者原因説」認識は相当に根深くかつ頑固であることがわかった。それでは、その認識といかに向き合っていけばいいのだろうか。

第1に、私たちが性急にやってはいけないことは、「それは間違っている」と頭から否定したりお説教をしたりする行為である。そうすると、学生たちは表面では「受け入れる」顔をするかもしれないが、自分で探究した結果の認識ではないので早晚剥がれて行ってしまふであろう。さらに、自信ありげに「被害者原因説」が強調されると、学生たちはそれ

に足元をすくわれる可能性もある。

私たちがまずしなければならないことは、学生たちとともにこの認識を見つめ、吟味し、検討し合うことである。このテーマと真摯に向き合わせるこそが重要なのである。

第2に、様々な意見と体験を持った他者と意見交流を活発に行うことである。私の授業での一番の成果は「受講生の多様な考え方に触れることができた」と言っているように、同世代同士の交流・討論・学び合いの機会を保障することである。「被害者原因説」を、自分が捉え直すべき課題として自覚することができたなら、それこそ学習の大きな成果であると言えるだろう。

第3に、今後さらに検討すべき課題があることにも注目したい。土井の言う「いじめを生み出す『優しい関係』」を始めとした様々な言説について、探究を続けていくことである。また、今回明らかとなった「発達障害ゆえのいじめ被害」論については、さらに実態研究と克服の道を探っていく必要がある。

《引用文献》

- 1) 相澤雅文「発達相談から見た発達障害児のいじめ・不登校等」日本特別ニーズ教育（SNE）学会第15回大会、2009.10.18、山形大学。
- 2) 尾木直樹『いじめ防止実践プログラム』1997年、学陽書房。
- 3) 尾木直樹『いじめ問題とどう向き合うか』2007年、岩波書店、岩波ブックレットNo.695。
- 4) 木堂椎『りはめより100倍恐ろしい』2007年、角川文庫。この小説は現役高校生だった木堂が、『野生時代』2005年12月号に発表した「すべてがケータイで書かれた世界初の小説」と言われている。第1回「青春文学大賞」を受賞し、2006年2月に角川書店から単行本として出版された。
- 5) 本稿では、加筆した文庫本を用いた。
- 5) 土井隆義『友達地獄―「空気を読む」世代のサバイバル』2008年、筑摩書房、ちくま新書710。
- 6) NHK『中学生日記』製作班『NHK中学生日記DVDブック いじめ、なくしたい!』2008年、毎日コミュニケーションズ。
- 7) 中井久夫「いじめとは何か」『季刊 仏教』No.37、1996年、法蔵館。なおこの論文については、横湯園子氏（中央大学教授）から教示された。
- 8) 和光大学2009「いじめ・不登校の教育学」レポート集「私の体験的いじめ論」。